

新平年値の特徴について

気象官署・特別地域気象観測所における新平年値（1991～2020年の平均）を現平年値（1981～2010年の平均）と比較すると、以下のような特徴があります。

◆平均気温（図1・図2）

- ・現平年値よりも高くなる季節・地域が多く、年平均気温では、北日本と西日本で+0.3℃、東日本で+0.4℃、沖縄・奄美で+0.2℃高くなり、地点によっては+0.5℃程度高くなることもあります。
- ・真夏日（日最高気温30℃以上）の年間日数の新平年値は、東日本から沖縄・奄美の多くの地点で3日以上増加し、猛暑日（日最高気温35℃以上）が4日以上増える地点もあります。冬日（日最低気温0℃未満）の年間日数の新平年値は北日本から西日本の多くの地点で2日以上減少します。
- ・日本の平均気温は、長期的に見て、様々な時間スケールの変動を伴いながら上昇しており、1980年代後半から急速に気温が上昇しています。その背景には、温室効果ガスの増加に伴う地球温暖化による長期的な昇温傾向と数十年周期の自然変動の影響があると考えられます。こうした地球温暖化や自然変動の影響に加え、地点によっては都市化も影響していると考えられます。
- ・岡山の年平均気温平年値は0.4℃低くなります。これは、平年値の期間が変わったことによる長期的な気温上昇の影響と、2015年の郊外への移転による現在の観測環境と比較するための補正の影響が合わさったことによります。

◆降水量（図3）

- ・春の西日本や夏の東日本太平洋側で5%程度少なくなります。夏の西日本や秋と冬の太平洋側の多くの地点で10%程度多くなります。

◆降雪量（図4）

- ・降雪量の新平年値は、現平年値と比べ、多くの地点で少なくなっており、30%以上減る地点もあります。
- ・気温は上昇し、降水量は増加している地点が多いことと合わせて考えると気温が高くなったことで、降水があっても雪ではなく雨として降りやすくなったことが要因の一つとして考えられます。
- ・このほか、積雪を観測している測器が超音波式積雪計からレーザー式積雪計に変わりました。レーザー式積雪計は超音波式積雪計より、雪面の凹凸や風による空気の揺らぎの影響を受けにくく、その影響が新平年値における降雪量が少なくなっている要因の一つとして考えられます。

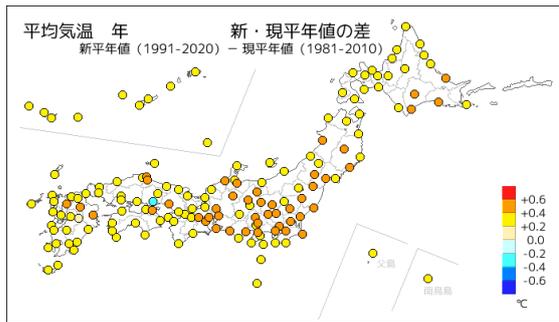
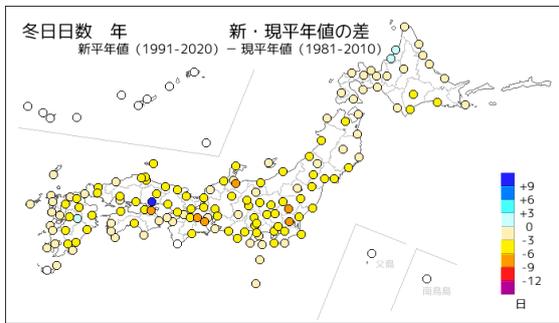
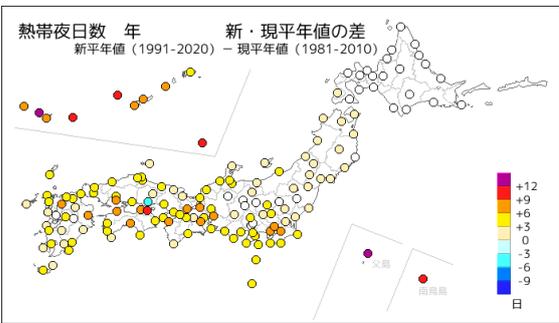
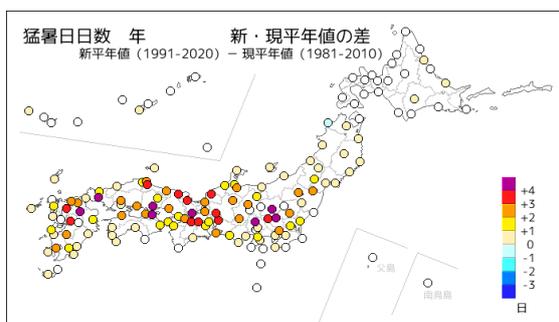
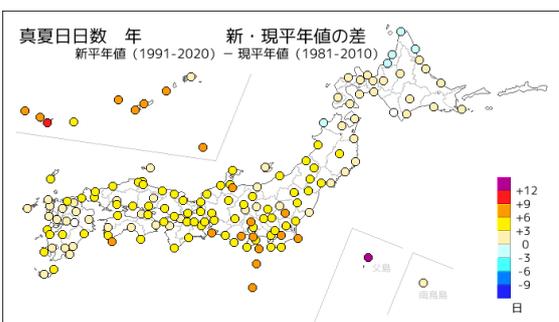
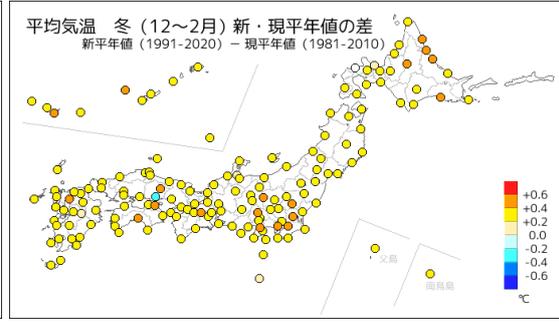
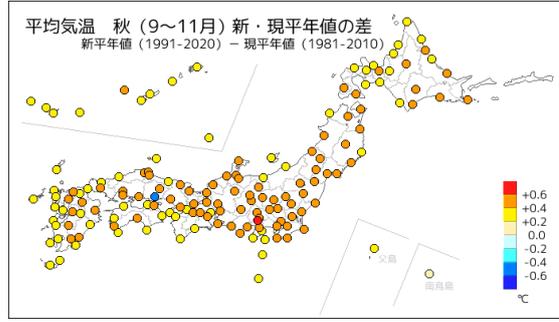
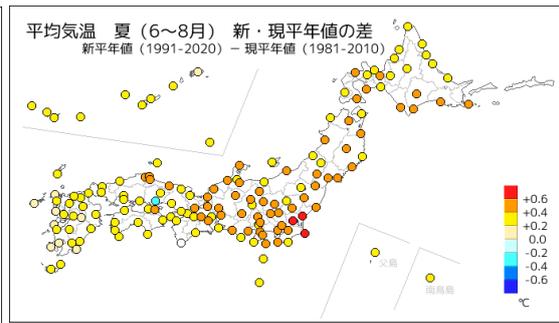
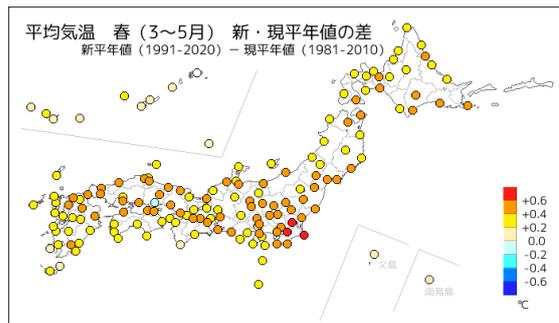


図1 新平年値と現平年値の差 (気温)
 気象官署 (特別地域気象観測所含む) における
 新平年値 (1991-2020年) から現平年値 (1981-
 2010年) を引いた差。年と各季節の平均気温、
 主な階級別年間日数について示します。



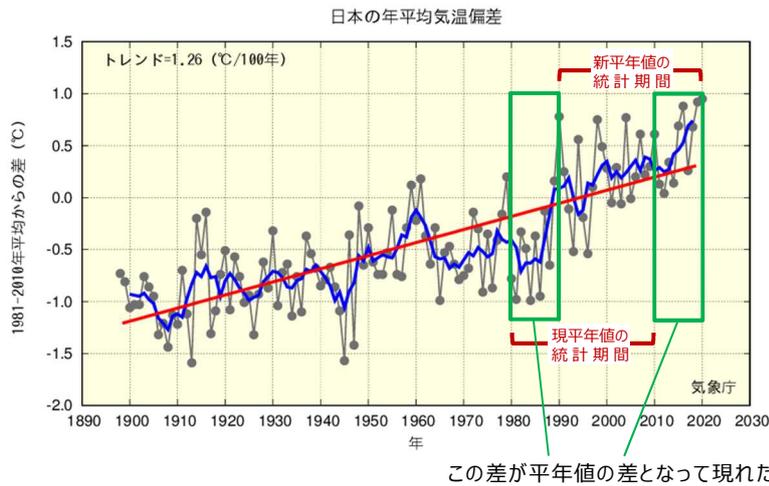


図2 日本の年平均気温の現平年値(1981-2010年)からの差の経年変化(1898-2020年) 都市化の影響が比較的少ない15地点の平均気温の平年差。

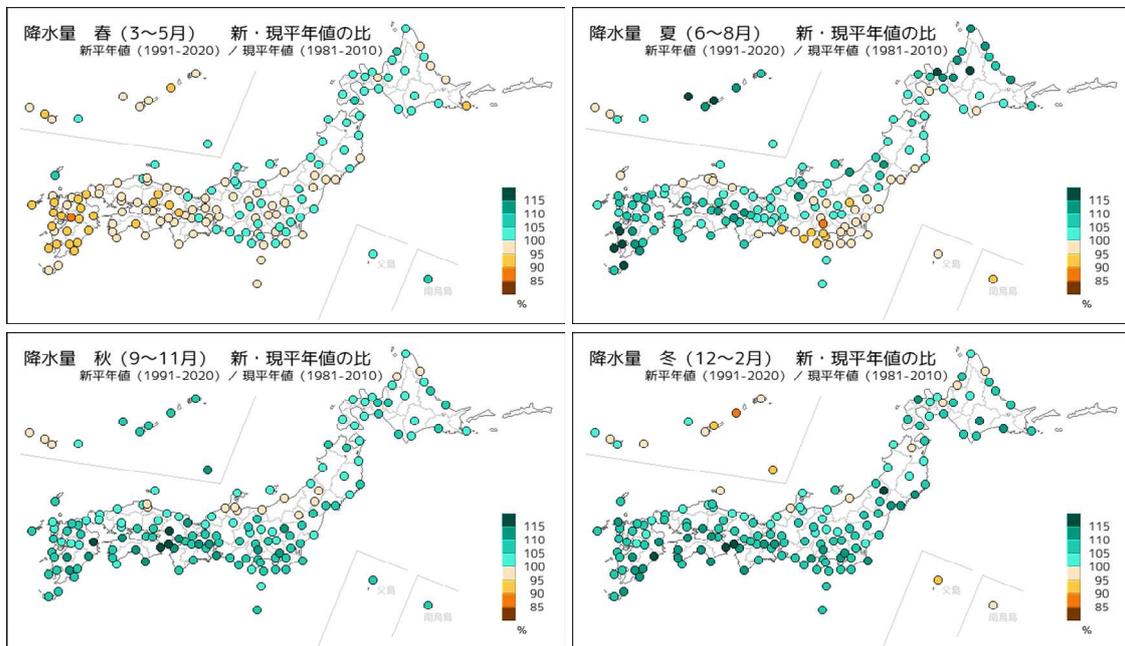


図3 新平年値と現平年値の比(降水量)
気象官署(特別地域気象観測所含む)における新平年値(1991-2020年)を現平年値(1981-2010年)で割った比率(%)。各季節の合計降水量について示します。

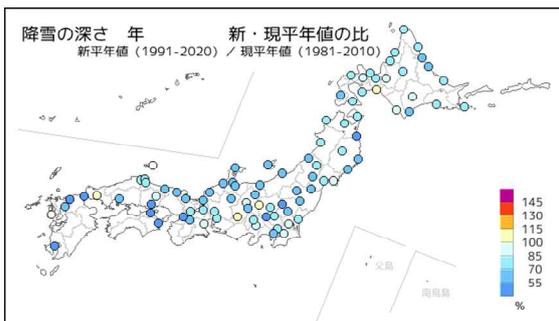


図4 新平年値と現平年値の比(降雪量)
気象官署(特別地域気象観測所含む)における新平年値(1991-2020年)を現平年値(1981-2010年)で割った比率(%)。現平年値が小さい場合でも比率が極端に大きく又は小さくならないよう、現平年値が3cm以上の地点のみ記載している。